The Science of Reading, Vol. 44, No. 2 (2000)

待遇表現の適切性判断における地域差，世代差および男女差の影響*

広島大学　宮　岡　弥　生
広島大学　玉　岡　賀津雄**

はじめに

「どちらへいらっしゃるんですか。」と「どこへ行くの。」の2つの表現は，相手にどこへ行くのかを尋ねるという共通の表現意図をもっている。しかし，これらを用いる相手や用いられる場面は，たいていの場合異なっている。敬語を含む前者の表現は通常，少し改まった場面であまり親しくない人に対して使われる。それに対して敬語を含まない後者の表現は，くだけた場面で同年配か年下の親しい友人に対して用いられることが多いであろう。このように，敬語の有無にかかわらず，話し手がその場の人間関係や場所柄・状況などについての気配りを土台にして選ぶいろいろな表現のことを待遇表現と呼ぶ（文化庁，1996；菊地，1997）。

待遇表現の使い分けに関する従来の研究は，発話場面に居合わせる人物を話し手と聞き手とに分けた場合、概ね話し手の立場から待遇表現を捉えたものであり、聞き手の側からの議論はあまりなされていない。しかし，待遇表現は基本的に話し手と聞き手の双方が存在して初めて成立するものである。仮に，話し手が置かれた状況において適切であると考えて用いたとしても，聞き手の側から判断すると違和感がある場合もあると考えられる。円滑なコミュニケーションを図る上で待遇表現が重要な役割を果たすという事実を考慮に入れると，聞き手の側の感じ方も無視できない。むしろ，待遇表現の発話場面において，その使い方が適切であるかどうかの判断は，話し手ではなく聞き手の側に委ねられていると言っても過言ではないであろう。そこで本研究では，待遇表現の使い分けを，従来のような話し手の側ではなく，聞き手の側から捉え，それを適切さという観点から質問紙を用いて数量的に測定した。そして，その適切さに対して，地域差，世代差，男女差があるのかどうかについて検討した。

具体的な予測としては，先行研究から以下のことが考えられる。まず、地域差について井上（1988）は、日本全国の各地域に，共通語の敬語と平行する形で方言の敬語が存在しているため日本語の敬語にはかなり著しい地域差があり，現代共通語の敬語体系ですべてを説明することはできないと述べている。方言の敬語について言えば，例えば，九州方言，西部方言，東部方言の順に，西の方ほど敬語の使い分けが多いことが報告されている（国立国語研究所，1957）。また，一見，全国一律であるかのように思われる共通語の待遇表現の丁寧さも，地域によって異なっている（文化庁，1999）。この理由として，方言の話されている地域では共通語で話すこと自体丁寧であると考えられている（加藤，1973）ことが挙げられるであろう。実際，目上の聞き手の行為を面と向かって言う場面で使われる形式は，熊本，大阪，東京，山形のうち，大阪で方言形と共通語形がほぼ半々である以外は，共通語形が圧倒的に多い（吉岡，1997）。以上

* The effects of differences in regional area, generation and gender on the appropriateness of polite expressions in Japanese.

**MIYAOKA, Yayoi (Hiroshima University) and TAMAOKA, Katsuo (Hiroshima University)

のことから，中国地方と関東地方を比べた場合，共通語の待遇表現を丁寧だと感じる度合いについては，中国地方の方が高いと思われる。しかし，本研究で明らかにしようとしている聞き手の捉えた適切さは，これと同じであるとは限らない。また，今回調査を行った中国地方と関東地方のもう一つの大きな違いは，中国地方において尊敬語の「れる・られる」が比較的高い待遇価値を持つものとして広く使われているということである。この方言の影響が本調査の結果にどのように現れるか興味深い。

次に，世代差に関しては，一般的に，若い世代の敬語の乱れが指摘されることが多い。敬語意識に関する調査でも，敬語を「適切に使っていると思う。」と答えた人の割合は，年代が下がるにつれて減っている（文化庁，1995)。しかし，その一方で，敬語を「相手や場面によって使い分ける方がよいと思う」人が，20代の男性では82.2%，女性では88.5%であるのに対して，50代の男性では67.7%，女性では81.4%であった（文化庁，1995)。この現象について北原（1995）は，若年層の人達には，敬語にはさまざまな表現があり，それを使い分ける方がよいが，敬語の使用が未熟であると思っている人が多いのだと指摘している。

このように，敬語に対する意識や実際の運用能力には世代差がある。従って，聞き手が捉えた待遇表現の適切さについても，同様に世代差があると考えられる。具体的には，世代が上になるほど丁寧な表現を好ましく思うという結果が得られると予想される。

また，待遇表現において男性と女性とで違いがあることは，これまでもよく指摘されてきた。例えば，女性は丁寧度の低い表現を男性に比べてより低くランクづけしており（井出・荻野・川崎・生田，1986)，男性より丁寧な話し方をする（文化庁，1997)。逆に，男性は女性より乱暴な表現のレパートリーが多い（文化庁，1996)。また，同じ場面で同じ依頼をするのにも，「～して」「～してよ」などの押しつけの強い依頼文は男性に多く，「～していただけない」のようなあまり押しつけがましくない表現や，はっきり依頼せず，やってほしいことをほのめかすような言い方は女性に多い（文化庁，1995)。さらに，同様の傾向は，言語習得の途上にある中高生にも見られる。国立国語研究所が1989年から1992年にかけて東京都，大阪府，山形県の中学校・高等学校の生徒を対象として行った調査（杉戸，1996）によると，先生・上級生との人間関係の中での言葉の使い分けには，男子よりも女子の方が留意しているという結果であった（尾崎，1997)。以上のように，話し手側から見た待遇表現の使い分けに男女差が見られることから，聞き手が捉えた待遇表現の適切さにも，男女差があると考えられる。具体的には，女性の方が男性よりも丁寧な表現を好ましく思うと予測される。

調　査

被験者　質問紙の回答者としての被験者は，以下の通りである。中国地方（広島，岡山の２県）在住の男性145名，女性187名の合計332名，および関東地方（東京，千葉，埼玉，神奈川の４県）在住の男性62名，女性154名の合計216名である。総計は548名となった。なお，今回，被験者の居住地を中国地方と関東地方の２地域としたのは，方言が話されている地域と共通語が話されている地域とで，共通語の待遇表現の適切性の判断に違いがあるかどうかを明らかにするためである。

質問紙　本調査では，２つの場面を想定して質問紙を作成した。場面１は，「あなたが道を歩いていると，見知らぬ女性が近づいてきて，あなたが駅の方へ行くのかどうかを尋ねました。」（以下，「初対面」と表記する。）である。場面２は，「あなたは，あなたの家で，家族ぐるみのつき合いをしている女性と２人で雑談をしています。その時その女性が，次の日に開かれるコンサートにあなたが行くのかどうかを，あなたに尋ねました。」（以下，「親しい間柄」と表記する。）である。これら２つのそれぞれの場面について，待遇価値の異なる「行くの」・「行くんですか」・「行かれるんですか」・「いらっしゃるんですか」の各表現を発話者の日本人女性が用いたとき，どのように感じるかを被験者に尋ねた。待遇表現に対す

る被験者の感じ方は，‘とても気になる’を1点，‘少し気になる’を2点，‘どちらとも言えない’を3点，‘あまり気にならない’を4点，‘全然気にならない’を5点とする5段階尺度で測定した。これを，待遇表現の「適切度」と呼ぶ。つまり，「適切度」とは，待遇表現を聞き手の側からみた場合に，適切だと感じられる度合いである。

なお，本調査においては，待遇表現に対する被験者の感覚を刺激するために，発話者を女性に限定した。これは，女性の方が男性よりも丁寧な言葉づかいをするというのが一般的な認識であるため，発話者が女性である方が，聞き手が発話者に敬語を要求する度合いが高いと思われるからである。場面条件としての女性発話者については，上記の「初対面」と「親しい間柄」の2つを，さらに年齢で「年下」と「年上」の2種類に分けた。従って，質問の条件として設定した女性発話者は，合計4種類となる。

分析と結果

本研究は，被験者内の変数として，「行くの」，「行くんですか」，「行かれるんですか」，「いらっしゃるんですか」の4つの待遇表現を，また被験者間の変数として中国地方と関東地方の2地域，20代，30代，40代，50代の4世代，および男性と女性の2種類で，合計3種類の変数を設定した。以下，地域差，世代差および男女差の3つの観点から分析の結果を報告する。

1．地域による適切性判断の違い

1-1．発話者の女性が初対面の年下である場合

各待遇表現の地域別適切度の平均値は，Fig. 1およびFig. 2に示した通りである。被験者内変数を待遇表現，被験者間変数を地域として，4×2の分散分析を行った。その結果，地域［$F(1,546)=6.83$，$p<.05$］および待遇表現［$F(3,1638)=550.42$，$p<.05$］の主効果が有意であった。また，地域と待遇表現の交互作用［$F(3,1638)=9.35$，$p<.01$］も有意であった。さらに，4つの待遇表現の適切度をスチューデント・ニューマン・クールズ検定（Student-Newman-Keuls Test；SNK検定）による多重比較で分析した。その結果，4つの待遇表現のすべてについて有意な地域差があった。具体的には，「行くの」を除いては，すべて中国地方よりも関東地方の方が適切度が高かった。

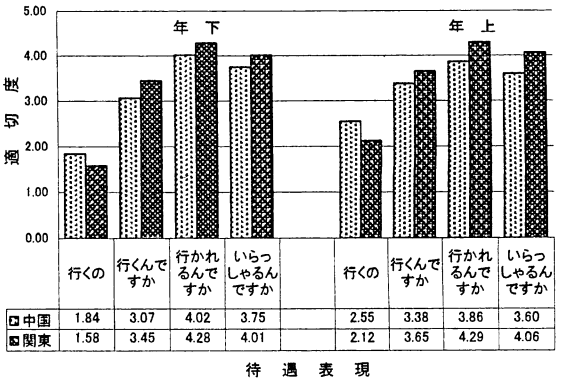


Fig. 1　初対面の女性発話者が用いた待遇表現に対する地域別適切度

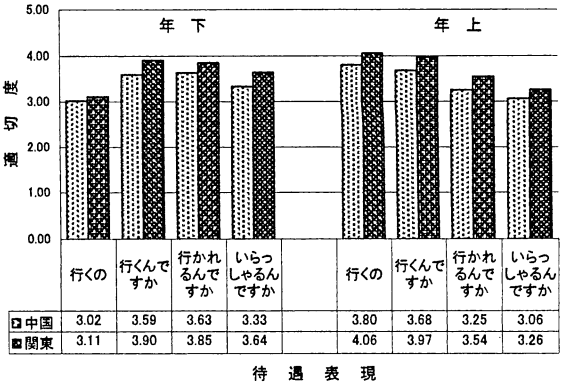


Fig. 2　親しい女性発話者が用いた待遇表現に対する地域別適切度

1-2．発話者の女性が初対面の年上である場合

待遇表現と地域の4×2の分散分析を行った。その結果，地域［$F(1,546)=7.28$，$p<.05$］および待遇表現［$F(3,1638)=260.76$，$p<.01$］の主効果が有意であった。また，地域と待遇表現の交互作用［$F(3,1638)=19.01$，$p<.01$］も有意であった。4つの待遇表現の適切度をSNK検定による多重比較で分析した結果，4つの

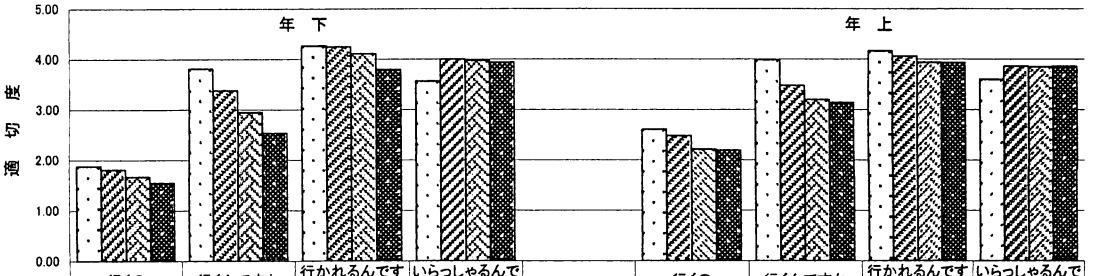
待遇表現のすべてについて有意な地域差があった。「初対面の年下」の場合と同様に，「行くの」は関東地方よりも中国地方の方が適切度が高かったが，その他の表現はすべて中国地方よりも関東地方の方が高かった。

1－3．発話者の女性が親しい年下である場合

同様の分散分析の結果、地域［$F(1,546)=11.68$, $p<.01$］および待遇表現［$F(3,1638)=35.37$, $p<.01$］の主効果が有意であった。地域と待遇表現の交互作用は有意ではなかった。待遇表現ごとに、適切度をSNK検定による多重比較で分析し，待遇表現別の地域差の有無について検討した。その結果，「行くの」については有意な地域差がなかった。その他の表現については地域差が見られ，中国地方よりも関東地方の方が適切度が高かった。

1－4．発話者の女性が親しい年上である場合

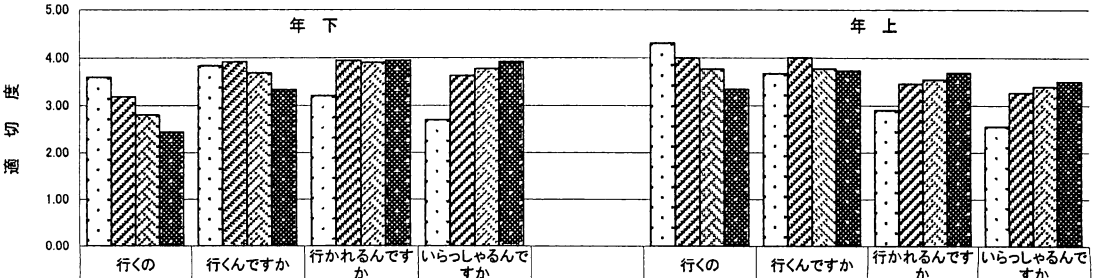
同様の分析の結果，地域［$F(1,546)=11.19$, $p<.05$］および待遇表現［$F(3,1638)=51.07$, $p<.05$］の主効果が有意であった。しかし，地域と待遇表現の交互作用は有意ではなかった。待遇表現の適切度をSNK検定による多重比較で分析した結果，「いらっしゃるんですか」には有意な地域差がなかった。その他の表現には有意な地域差があり，すべて中国地方よりも関東地方の方が適切度が高かった。これは，「親しい年下」の場合とは，逆の現象である。



	行くの	行くんですか	行かれるんですか	いらっしゃるんですか	行くの	行くんですか	行かれるんですか	いらっしゃるんですか
20代	1.88	3.82	4.27	3.57	2.61	3.99	4.17	3.60
30代	1.81	3.38	4.25	4.00	2.48	3.48	4.06	3.86
40代	1.67	2.95	4.11	3.98	2.21	3.20	3.94	3.85
50代	1.55	2.54	3.80	3.94	2.19	3.14	3.93	3.86

待 遇 表 現

Fig. 3　初対面の女性発話者が用いた待遇表現に対する世代別適切度



	行くの	行くんですか	行かれるんですか	いらっしゃるんですか	行くの	行くんですか	行かれるんですか	いらっしゃるんですか
20代	3.60	3.84	3.21	2.70	4.31	3.68	2.90	2.56
30代	3.19	3.92	3.95	3.64	4.00	4.01	3.46	3.27
40代	2.81	3.69	3.91	3.78	3.77	3.78	3.55	3.40
50代	2.44	3.34	3.95	3.92	3.35	3.74	3.69	3.51

待 遇 表 現

Fig. 4　親しい女性発話者が用いた待遇表現に対する世代別適切度

2．世代による適切性判断の違い

2－1．発話者の女性が初対面の年下である場合

各待遇表現の世代別適切度の平均値は，Fig. 3およびFig. 4に示した通りである。被験者内変数を待遇表現，被験者間変数を世代として，4×4の分散分析を行った。その結果，世代［$F(3,544)=10.48$，$p<.05$］および待遇表現［$F(3,1632)=559.16$，$p<.05$］の主効果が有意であった。また，世代と待遇表現の交互作用［$F(9,1632)=11.26$，$p<.01$］も有意であった。4つの待遇表現の適切度をSNK検定による多重比較で分析した。その結果，「行くの」については20代が最も適切度が高く，次が両者に有意差のなかった30代と40代，最も適切度が低かったのは50代であった。「行くんですか」は，すべての世代の適切度が互いに有意に異なっており，世代が上がるほど適切度が低くなっていった。「行かれるんですか」は50代が他の世代に比べて有意に低かった。「いらっしゃるんですか」は，20代が他の世代に比べて有意に低かった。つまり，20代から50代までのすべての世代で適切度が有意に異なっていたのは，「行くんですか」のみであった。

2－2．発話者の女性が初対面の年上である場合

同様の分散分析を行った。その結果，世代［$F(3,544)=5.61$，$p<.05$］および待遇表現［$F(3,1632)=237.45$，$p<.05$］の主効果が有意であった。また，世代と待遇表現の交互作用［$F(9,1632)=5.68$，$p<.01$］も有意であった。4つの待遇表現の適切度をSNK検定による多重比較で分析した。その結果，「行くの」については20代が最も適切度が高く，次が30代で，最も適切度が低かったのは両者に有意差のない40代と50代であった。「行くんですか」は，20代の適切度が他の世代に比べて有意に高かった。「行かれるんですか」および「いらっしゃるんですか」は、ともにすべての世代間に有意差はなかった。

2－3．発話者の女性が親しい年下である場合

同様の分散分析を行った。その結果，世代［$F(3,544)=5.08$，$p<.05$］および待遇表現［$F(3,1632)=45.70$，$p<.05$］の主効果が有意であった。また，世代と待遇表現の交互作用［$F(9,1632)=23.85$，$p<.01$］も有意であった。4つの待遇表現の適切度をSNK検定による多重比較で分析した。その結果，「行くの」についてはすべての世代間に有意差が見られ，世代が上がるほど有意差が低くなっていった。「行くんですか」は，50代が他の世代に比べて有意に適切度が低かった。「行かれるんですか」は20代が他の世代とは有意に低かった。「いらっしゃるんですか」も，20代が他の世代とは有意に低かった。つまり，適切度について，すべての世代間に有意差があったのは，「行くの」のみであった。

2－4．発話者の女性が親しい年上である場合

同様の分散分析を行った。その結果，世代［$F(3,544)=3.74$，$p<.05$］および待遇表現［$F(3,1632)=45.38$，$p<.05$］の主効果が有意であった。また，世代と待遇表現の交互作用［$F(9,1632)=15.57$，$p<.01$］も有意であった。4つの待遇表現の適切度をSNK検定による多重比較で分析した。その結果，「行くの」については最も適切度が高かったのは20代で，次が両者に有意差のなかった30代と40代，最も適切度が低かったのは，50代であった。「行くんですか」は，世代間に有意差はなかった。「行かれるんですか」および「いらっしゃるんですか」は，20代が他の世代とは有意に低かった。つまり，「行くんですか」のみ，すべての世代間に有意な適切度の差があった。

3．性別による適切性判断の違い

3－1．発話者の女性が初対面の年下である場合

各待遇表現の男女別適切度の平均値は，Fig. 5およびFig. 6に示した通りである。被験者内変数を待遇表現，被験者間変数を男女として，4×2の分散分析を行った。その結果，男女［$F(1,546)=12.06$，$p<.05$］および待遇表現［$F(3,1638)=490.51$，$p<.05$］の主効果が有意であった。また，男女と待遇表現の交互作用［$F(3,1638)=4.43$，$p<.01$］も有意であった。4つの待遇表現の適切度をSNK検定による多重比較で分析した。その結果，「行くの」と「行くんですか」は男女間に有

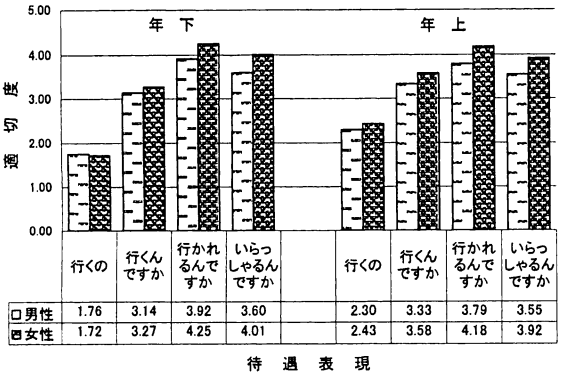


Fig. 5 初対面の女性発話者が用いた待遇表現に対する男女別適切度

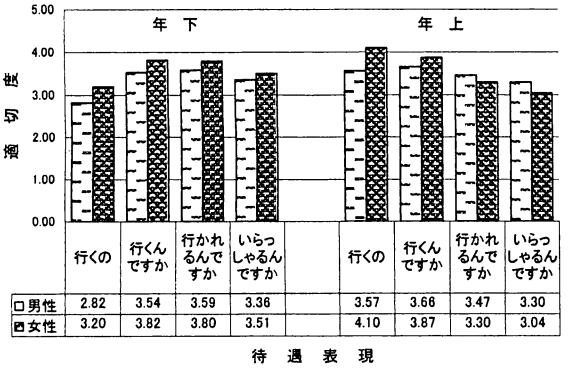


Fig. 6 親しい女性発話者が用いた待遇表現に対する男女別適切度

意差がなく，「行かれるんですか」と「いらっしゃるんですか」については女性の方が男性よりも適切度が高かった。つまり，性別の影響が見られたのは，待遇価値の比較的高い表現であった。

3－2．発話者の女性が初対面の年上である場合

待遇表現と男女の4×2の分散分析を行った。その結果，男女［$F(1,546)=18.45$, $p<.05$］および待遇表現［$F(3,1638)=213.38$, $p<.01$］の主効果が有意であった。しかし，男女と待遇表現の交互作用は有意ではなかった。4つの待遇表現の適切度をSNK検定による多重比較で分析した結果，「行くの」は男女間に有意差がなかったが，その他の表現はすべて女性の方が男性よりも適切度が高かった。つまり，待遇価値の低い表現については，性別の影響は見られなかった。

3－3．発話者の女性が親しい年下である場合

同様の分散分析の結果，男女［$F(1,546)=13.80$, $p<.01$］および待遇表現［$F(3,1638)=34.88$, $p<.01$］の主効果が有意であった。男女と待遇表現の交互作用は有意ではなかった。待遇表現ごとに、適切度をSNK検定による多重比較で分析した。その結果，「行くの」と「行くんですか」には有意差があり，ともに女性の方が適切度が高かった。一方，「行かれるんですか」と「いらっしゃるんですか」には有意差がなかった。つまり，待遇価値が比較的高い表現について，性別の影響があった。これは，「初対面の年下」の場合とは逆の現象である。

3－4．発話者の女性が親しい年上である場合

同様の分析の結果、男女の主効果に有意差はなかった。しかし，待遇表現［$F(3,1638)=39.39$, $p<.05$］，および男女と待遇表現の交互作用［$F(3,1638)=13.25$, $p<.05$］は有意であった。待遇表現の適切度をSNK検定による多重比較で分析した結果，「行くの」と「行くんですか」は女性の方が男性よりも有意に適切度が高かった。しかし，「行かれるんですか」と「いらっしゃるんですか」には男女差がなかった。つまり，「親しい年下」の場合と同様に，待遇価値の比較的低い表現について，性別の影響があった。

総合考察

本研究では，適切度を判断する聞き手の側の属性である地域，世代，男女の3つの要因が，待遇表現の適切度に与える影響を測定した。以下，それぞれの要因について考察する。

1．地域差の影響

方言が話されている中国地方と共通語が話されている関東地方とで，共通語の待遇表現の適切さの判断に違いが見られた。初対面の場合は，発話者が年下であるか年上であるかに関係なく，「行くの」という丁寧とは言えない表現を用いることに対して，中国地方の人達の方が

関東地方の人達よりも寛容であった。この理由として，地域による待遇表現体系の違いが考えられる。つまり，既述のように，方言が広く使われている地方では，方言で話していたものを共通語に言いかえること自体，すでに丁寧な言い方をしていることになるのである（加藤，1973)。従って，「行くの」という丁寧でない表現も，中国地方においては共通語であるという点で方言の「行くん」よりも丁寧であると感じられるのである。「行くの」の適切度が中国地方の方が高かったのは，このためであると考えられる。

日本語では方言と共通語の混在によって地域ごとに待遇表現体系が異なっており，語形が同じ共通語の待遇表現であっても，待遇価値が地域によって異なっている（文化庁，1999)。そのため，本研究で明らかになったように，聞き手による待遇表現の適切性の判断も，中国地方と関東地方とで異なっていたのであろう。

また，全体的な傾向として，関東地方の方が中国地方よりも適切度が高かった。具体的には，同じ初対面の場面において，「行くの」よりも待遇価値の高い「行くんですか」，「行かれるんですか」，「いらっしゃるんですか」については，関東地方の人達の方が中国地方の人達よりも，より適切であると受け取っていた。また，親しい間柄では，年下の女性の「行くの」，および年上の女性の「いらっしゃるんですか」については地域差がなかったが，その他の表現については初対面の場合と同様に，関東地方の人達の方が中国地方の人達よりも，より適切であると感じていた。このような結果は，先行研究から予測される丁寧さの地域差とは異なっている。前述の通り，方言よりも共通語の方が丁寧であると考えられているため，本研究でとりあげた共通語の待遇表現を丁寧だと感じる度合いは，中国地方の方が高いであろう。ところが，聞き手が適切だと感じる度合いについては，この逆であるという結果が得られた。これはつまり，本研究で設定したようなインフォーマルな場面では，共通語の敬語は丁寧過ぎて違和感を覚えるということであろう。

一方，中国地方においては尊敬語の「れる・られる」の使用率が他のどの地域よりも高い（文化庁，1997）ことから，本研究でとりあげた「行かれるんですか」に対する適切度も，関東地方よりも高いことが予想された。しかし，実際は，中国地方における尊敬語の「れる・られる」の使用率の高さは，結果に影響していなかった。

2．世代差の影響

初対面と親しい場面の各待遇表現のうち，すべての世代間に有意差があったのは，初対面の年下が用いた「行くんですか」と，親しい年下の「行くの」のみであった。その他の表現では，20代と50代が他の世代とは有意に異なっている場合が多く，30代と40代はすべての条件において同じグループに属していた。

また，初対面の相手か親しい相手かという親疎関係，また，年下か年上かという年齢による上下関係を問わず，相手の女性が待遇価値の低い表現を用いることを，世代が上がる（年齢が高くなる）ほど適切だと感じていない傾向が観察された。逆に，待遇価値の高い「いらっしゃるんですか」については，初対面の場合も親しい場合も，20代の適切度が低かった。

先行研究においては，敬語を使いたいと思うが十分に使えていないと思っている人の比率は，若い世代ほど高くなっており，男女ともに若年層ほど敬語の使い分けに対してより敏感であるということが報告されている（文化庁，1995；北原，1995)。これを本研究の結果と考え合わせると，若い世代は敬語能力はあまり高くないが敬語の使い分けには敏感で，その敏感さは，待遇価値の高い表現を敬遠するという形で現れていると言えるであろう。

これは，中・高校生の約半数が，敬語使用はよそよそしくなり，親しい心の交流やざっくばらんなつきあいがしにくくなるなどのマイナスの効果を持つと考えているという調査結果（尾崎，1997）と重なるのではなかろうか。同様に，親しい人に敬語を使うのはよそよそしいと考えている人の割合を，20代から50代までの世代別で見ると，世代が若くなるほどその割合が高くなっている（文化庁，1995)。このように，自分の敬語使用をよそ

よそしいと感じるのであれば，自分に対して敬語を使われることにも違和感を覚えるであろう。

3．男女差の影響

男女間に有意差があったのは，2つの場面でのべ16通りある待遇表現のうち，9つであった。具体的には，発話者が被験者と初対面の間柄である場合には，年下であるか年上であるかに関わらず，女性の方が男性よりも丁寧な表現を適切だと感じる度合いが高いという結果であった。話し手側からの先行研究にも，目上の人に対しては，女性の方が男性よりも丁寧な表現を好んで使うという調査結果（文化庁，1995）がある。女性は，初対面の相手に対しては，自分のことばも相手のことばも丁寧な方を好むと言えるであろう。

ところが，親しい間柄では，発話者が年下の場合も年上の場合も，待遇価値の低い「行くの」という表現に対して寛容なのは女性の方であった。この理由として，相手が同性であるということが考えられる。国立国語研究所の調査（1982）でも，特に女性に顕著な特徴として，相手が自分と同性であれば言葉遣いに対して無頓着に，異性であれば気を配る方に傾くという結果が出ている。これは，自分の言葉遣いについてのことであるが，相手の言葉遣いについても，同様のことが言えるであろう。

また，主効果の有無という観点から分析結果を捉えると，待遇表現の男女差に主効果が表れたのは，発話者の女性が「初対面の年上」である場合と「親しい年下」の場合であった。通常，親疎関係で言えば親しい相手よりも初対面の相手に，また，年齢の上下関係で言えば年上よりも年下の相手に対して，丁寧な表現を要求するであろう。とすると，男女差のあった「初対面の年上」および「親しい年下」の相手というのは，丁寧な表現を要求する度合いが高い条件と低い条件が結びついたものであると言えよう。つまり，発話者の女性が「初対面の相手なので敬語を使って欲しいが，自分より年上だから敬語を使われることには違和感がある」場合と，「親しいから敬語を使われることには違和感があるが，年下だから敬語を使って欲しい気もする」場合の，相手に敬語を求めるかどうかが微妙な条件において，男女差が表れたことになる。これは，男性と女性とで，上下関係と親疎関係のどちらを重んじるかに差異があるためではなかろうか。

ただ，このような言葉遣いにおける男女差は消えつつあると言われている。かつて，女性は，「お」のつけすぎなど過剰な敬語を用いる傾向があった。しかし，今日では，男性と女性の言葉遣いに差はなくなりつつある（国語審議会，1995）。また，男女の表現の違いについての意識調査（文化庁，1995）によると，「男女の言葉遣いに違いがなくなってきている」ことに対して41.2％の人が「自然の流れでありやむをえない」，44.1％の人が「違いがある方がよい」と答えている。これを世代別に見ると，前者の意見は若年層ほど支持率が高く，後者の意見は高年層ほど支持率が高い。このことからも，今後はさらに男性と女性の言葉遣いが類似していく方向にあると予測される。

総　括

本研究では，発話場面における待遇表現の適切さの判断が，「話し手」ではなくむしろ「聞き手」の側に委ねられていると言う認識のもとに，地域差，世代差および男女差の要因を調査した。そして，すべての3要因の影響が観察された。まず，地域差については，待遇価値の低い共通語の待遇表現に対して寛容であるのは，関東地方ではなく，むしろ中国地方であった。また，世代差については，世代が上がるほど，話し手が初対面の相手か親しい相手か，年下か年上かを問わず，話し手の女性が待遇価値の低い表現を用いることを好まない傾向が観察された。男女差については，全体的に女性の方が男性よりも待遇価値の高い表現を好むという結果であった。さらに，興味深い結果は，地域，世代および男女の別なく，親疎関係で言えば「疎」であり，上下関係で言えば「下」であるため，最も待遇価値の高い表現が求められると思われる初対面の年下の女性発話者であっても，「いらっしゃるんですか」という最も待遇価値の高い表現が最適

であるとは受け取られていなかったことである。この結果は，待遇表現の使い分けが，文法的な待遇表現体系の側面からだけでは説明できないことを示唆している。

引用文献

文化庁（1996）新「ことば」シリーズ４　言葉に関する問答集―敬語編(2)―，大蔵省印刷局

文化庁文化部国語課（1995）国語に関する世論調査　平成７年４月調査，大蔵省印刷局

文化庁文化部国語課（1997）国語に関する世論調査　平成９年１月調査，大蔵省印刷局

文化庁文化部国語課（1999）国語に関する世論調査　平成11年１月調査，大蔵省印刷局

第20期国語審議会（1995）新しい時代に応じた国語施策について，国語年鑑1995年版，秀英出版

井出祥子・荻野綱男・川崎晶子・生田少子（1986）日本人とアメリカ人の敬語行動，南雲堂

井上史雄（1988）言葉づかい新風景，秋山叢書

加藤正信（1973）全国方言の敬語概観，敬語講座６　現代の敬語，明治書院

北原保雄（1995）敬語意識と敬語表現，国文学，40(14)，6－9

菊池康人（1997）敬語，講談社

国立国語研究所（1957）敬語と敬語意識，秀英出版

国立国語研究所（1982）企業の中の敬語，三省堂

尾崎喜光（1997）「学校の中の敬語」調査から，日本語学，16(13)，34–46

杉戸清樹（1996）敬語行動についての意識，平成８年度国立国語研究所公開研究発表会配布資料

吉岡泰夫（1997）敬語行動と規範意識の地域差，月刊言語，58–65

SUMMARY

The Japanese use polite expressions in diverse ways according to a variety of conditions such as the closeness of the relationship between speaker and listener, their social status or gender difference, where they live, and their positions in the workplace. Previous studies on the appropriate use of polite expressions have mainly investigated the subject from the speaker's point of view. However, it is actually the "listeners" who judge the appropriateness of polite expressions. Therefore, the present study examines the appropriate expression of Japanese politeness from the perspective of the listener.

The research took the form of a questionnaire in which subjects were asked to play the role of listener and to judge the appropriateness of four different levels of expressions; that is, 行くの/ikuno/, 行くんですか/ikuNdesuka/, 行かれるんですか/ikareruNdesuka/, and いらっしゃるんですか/iraQsaruNdesuka/. Of the 548 subjects who participated in the study, 332 were from the Chugoku area (145 males and 187 females) and 214 were from the Kanto area (62 males and 154 females). The subjects were also divided into four age groups of 20s, 30s, 40s and 50s to analyze differences among generations. Four conditions were created by varying the speaker's age and closeness to the listener, e.g., a younger or older female speaker in the two conversa tional situations of a first meeting or between well–acquainted people. In this questionnaire, a female speaker was used in order to stimulate the sense of politeness because, in general, females tend to speak more politely than males. The appropriateness was judged on a five–point scale from "hurts my feelings very much" as 1 point to "does not hurt my feelings at all" as 5 points. The study analyzed the effects of differences in living area, generations, and gender on the appropriate nature of polite expressions.

The results showed that the most polite expression of

いらっしゃるんですか/iraQsaruNdesuka/was not the most accepted expression by subjects as listeners, even in the condition of a first-met and younger speaker who is naturally expected to use the most polite form of address. The most accepted expression was 行かれるんですか/ikareruNdesuka/, which has a lesser degree of politeness than いらっしゃるんですか/iraQsaruNdesuka/. This finding suggests that the appropriate use of polite expressions cannot be wholly explained by the systematic principles of linguistics that concern expressions of politeness. In the condition of well-acquainted speaker and listener, both 行くんですか/ikuNdesuka/, and 行かれるんですか/ikareruNdesuka/were the most accepted expressions. The more familiar expression of 行くの/ikuno/ was least accepted, even when a well-acquainted older speaker used it.

The judgement of appropriateness in polite expressions by subjects as listeners was affected by area of residence, age and gender. Where geographical area was concerned, subjects from the Chugoku area were more tolerant of the familiar expression of 行くの/ikuno/, than were subjects in the Kanto area who showed a marked preference for the more polite expressions. Regional discrepancies such as these may arise from differences between dialects and standard Japanese. Subjects whose dialects are characterized by polite expressions will tend to prefer the more polite forms of the standard language, whereas speakers of less formal dialects will feel at home with that dialect's more casual terms of address. Subjects as listeners showed gender differences regarding the conditions of the "first-met older" and "well-acquainted younger" speakers in which female subjects were more likely than male subjects to judge all polite expressions as most appropriate. There were no gender differences in the conditions of "first-met younger" and "well-acquainted older" speakers. The subject's generation strongly affected the judgement of the appropriateness of polite expressions. For example, subjects in their forties were inclined to dislike the familiar expressions used by the speaker regardless of the speaker's age and closeness. By contrast, subjects in their twenties said they were not comfortable with the use of the polite expressions.